

さとうきびにおけるメイチュウ類(イネヨトウ)防除対策について

八重山地域において、さとうきび夏植圃場におけるメイチュウ類、特にイネヨトウによる被害が一部地域で多い状況です。今後の被害拡大が懸念されます。植付時からの計画的な防除がメイチュウ類の被害防止につながります。貴管下における防除対策のご指導をよろしくお願ひします。

1 被害の発生状況

- (1) 平成23年4月12日、石垣市役所農政経済課職員より、石垣市の一部地域において夏植圃場でのメイチュウ類による被害が多発しているとの情報があり、4月13～15日にかけて被害調査を行った。
- (2) 被害圃場の一部では欠株が多く見られ(図1)、被害茎からはイネヨトウの幼虫が確認された(図2)。多発圃場でのメイチュウ類による芯枯茎率は45～63%であった。その他の夏植圃場(11圃場)における芯枯茎率は8.9%であった。
- (3) 4月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによる、トラップ当たり日当たり誘殺虫数は1.4頭(昨年0.5頭)であった。
- (4) 八重山農林水産振興センターによると、竹富町や与那国町の一部夏植圃場でもメイチュウ類による芯枯被害が多発傾向にある。

2 発生生態および被害

(1) イネヨトウ

- a 沖縄では年5～7世代を重ね、幼虫は5月と9～10月に発生が多い。
- b 卵は葉鞘の裏側に卵塊で産み付けられ、1雌当たりの生涯産卵数は400～700卵に達する。ふ化幼虫は集団で葉鞘内部を食害する。3～4齢になると他の茎に分散し、葉鞘の外側から孔を開けて食入し、生長点を加害して芯枯れを起こす。幼虫は5～7齢になるものもあり、老熟幼虫の体色は薄紫～ピンク色を帯びる。茎や葉鞘内で繭を作り蛹化する。
- c 初期被害は圃場周縁部で見られ、圃場内でスポット状や畝に沿って被害が拡大する。被害が集中的に起こるため、生育初期に加害されると坪枯れを起こすこともある。

(2) カンシャシクイハマキ

- a 年6～7世代を重ね、年間を通して各ステージが見られる。
- b 卵は葉や茎などに1～数卵ずつ産み付けられ、1雌当たりの生涯産卵数は200～500卵に達する。ふ化幼虫は葉鞘の内側を下降して節部の芽や根帯から食入し生長点を加害し芯枯れを起こす。老熟幼虫の体色は淡黄色を帯び、4～8齢を経て食入孔や葉鞘内で繭を作り蛹化する。
- c 被害は圃場に散在的に発生する。

3 防除対策上注意すべき事項

- (1) 圃場および周辺の除草を徹底する。
- (2) 全茎苗は剥葉し、メイチュウ類の加害芽子のある苗は使用しない。
- (3) 植付時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し、植溝施用する(図3)。
- (4) 発芽揃期から有効分けつ期の芯枯れ防止をねらい、食入初期の幼虫を対象にした薬剤防除を行う。乳剤の場合は、葉鞘内に薬液が浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、茎と葉元の上に散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
- (5) 培土時には土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- (6) 被害の多い地域では薬剤による一斉防除を行う。
- (7) 薬剤散布の際は飛散(ドリフト)防止に努める(図4)。



図1 イネヨトウによる被害圃場



図2 イネヨトウ幼虫



図3 薬剤(粒剤)は植溝処理する



図4 葉鞘内へ十分に薬液を浸透させる